

多方面・多地域の資料収集と細緻な分析・研究の成果が本書と言える。「祭祀演劇の角度から中国演劇史を再構成したい」という意図はここにみごとに結実している。「通史」の体裁を取った本書は研究の上では特に見るべき進歩があっただけではなく、基本的に構想と言う点では、前著で提起した枠をでていない気がする。

本書は極めて幅広い問題を扱いながらも、中国本土以外に、香港、台湾、東南アジアなどの事例から取り上げられた。個々のテーマに向かう著者の研究姿勢は一貫した課題意識に裏付けられており、今後の日中間での歴史文化人類学・民俗学的研究にとって大きな示唆となるものであろう。

参考文献

- ・田仲 一成著 『中国祭祀演劇研究』 東京大学出版社 1981

神野 善治著

『人形道祖神—境界神の原像—』

石本 敏也*

人形を作り、祀る風習は、日本各地に広く分布し、その信仰は多種多様で非常に複雑な様相を呈している。私事で恐縮だが、私は卒業論文で新潟県東蒲原郡の四地域に伝承されている「ショウキサマ」という藁人形を扱った。境に立つその巨大な姿は見るものを圧倒させ、思わず他者を引き込む魅力を持っていた。これらの人形については、戦前に幅広くまとめた柳田国男の「神送り与人形」を始め、多くの研究がなされているが、その中、本書は、徹底的にこの民間信仰の分野を具体的な「カタチ」に示される「モノ」に注目して把握しているところに大きな特徴がある。本稿では、

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

この神野善治の『人形道祖神 境界神の原像』の書評をすると同時に、若干の私見を述べてみるものである。以下、まず本書の構成を示し、概要を見ていきたい。

序 問題提起と研究方法

第一編 村境の大人形 東北日本の人形道祖神

第一章 藁人形探訪 人形道祖神論への試み

第二章 人形道祖神の諸相 (I) 藁人形の形態と呼称

第三章 人形道祖神の諸相 (II) 藁人形から木像へ

第四章 人形道祖神の諸相 (III)

第五章 人形道祖神の変容

第六章 東北日本の人形道祖神の特質 第一編のまとめ

第二編 小正月の道祖神祭り与人形 もう一つの人形道祖神

第一章 門入道と家ごとの人形道祖神

第二章 村ごとの人形道祖神

第三章 石像道祖神を焼く習俗

第四章 家々を巡る人形道祖神

第五章 道祖神を焼く意味

第六章 神像への変容 人形道祖神の恒常化と石像道祖神

第七章 小正月の人形と道祖神 第二編のまとめ

第三編 道祖神像の成立

本編の概要

第一章 人形道祖神と道祖神信仰の歴史

第二章 人形道祖神の二類型

第三章 問題点と今後の課題

補論 海外における人形道祖神の類型

一 朝鮮半島の長J (チャンスン)

二 中国・タイ国少数民族に見る境界神の人形

以上が、本書の構成である。これだけ見ても、筆者がいかに長い時間をかけて、一つひとつ自分の足でこの「人形道祖神」という類型を

作り上げてきたか、伺うことができよう。また、村の境に立つ大人形だけを取り上げるのではなく、小正月の行事に使われる人形をもう一つの人形道祖神と捉えているところも、「人形道祖神」の深みを増している。

以下、本書の構成に従いながら、内容を見ていくことにしたい。

まず、序では、従来の石像物中心に検討されていた道祖神に、「人形道祖神」という分野を加えることを提案している。これは、日本各地に伝わる「人形の民俗」と「道祖神信仰」の習俗の重なるところに、これまでの道祖神研究ではほとんど問題にされていなかった新しい分野を見だし、これに「人形道祖神」という呼称を与えて、「道祖神信仰」の中でどのように位置づけられるかを検討する。神野は、ここに「日本人が人形（ひとがた・にんぎょう）」というカタチを用いて、どのような精神世界を表現してきたかを垣間見ることができるのではないかとしている。そのために、神野は調査研究の方法を民俗学に依存しながらも、具体的な「カタチ」に示される「モノ」に注目して把握していこうとした方法を重要視している。その結果、人間の知的活動に基づいて形成される「情報」によって蓄積された「コト」と、人間の身体動作に基づく「エネルギー」によって形作られる「モノ」とに凝縮された伝承の両面を、従来ややもすると「挿し絵」としか扱われなかったモノの発散する情報にウエイトを置き、とことんそれにこだわりながら追求していく方法をとったと述べている。

次に、「第一編 村境の大人形」を見る。この編は、主に神野が収集した「人形道祖神」の事例報告という形をとっている。「第一章 藁人形探訪」では、神野と境に立つ藁人形との出会いが、紀行文の体裁で書かれてある。ここで、神野はこれらの人形神の共通の要素①疫病などの災厄が村に入るのを防ぐ目的で、②村人が力を結集して作り、③村境の路傍や、

村内の字ごとの境や道の辻などに立て、④一年中据え置かれる、⑤大きな藁人形、を見だし、これら人形は明らかに「境の神」としての性格を持って信仰されている人形神と考えられることを述べている。神野はこれらを「人形道祖神」という名称を与え、これに視点を定めて、これらの人形たちの魅力を引き出し、その実態をさらに浮き彫りにすることを当面の目標に掲げている。

「第二章 人形道祖神の諸相（Ⅰ）藁人形の形態と呼称」では、主に東北地方の人形道祖神の事例を紹介している。以後、第四章までは人形道祖神を素材の面から捉え、素材によって規定されてくる人形の形態の特徴を追いながら、事例を紹介する形になっている。この章では、藁や草の類を素材に作られた人形の例を列挙している。岩手、秋田、新潟などに見られるショウキ様、鹿島様などの人形のほか、辻や村外れなどに立てられる人形道祖神の例などが挙げられ、この鹿島送りと人形が重複している例も紹介されている。

「第三章 人形道祖神の諸相（Ⅱ）藁人形から木像へ」は、木製頭部を持つ藁人形と、道祖神の木像について多くの事例が報告されている。その中でも、長木川地域の人形神のまとめとして、藁人形の行事との併存を、「本来、毎年作っては村はずれに送り出していた藁製の人形があり、やがて木像の人形神を製作して恒常的に祀られるようになったものの、もとの藁人形行事もやめられず、両者が重複して残ったのではあるまいか」と推測を立て、「木像と藁人形は機能的に分化することなく併存し、藁人形は隣部落との境に、ドンジン様は家並みのとぎれる所の路傍に立てる。」と考えている。つまり、「二重に境界を設けて悪病の進入を阻止」するものであったのである。

「第四章 人形道祖神の諸相（Ⅲ）」は、会津、下野、武蔵、房総半島の人形道祖神の紹介がなされ、阿武隈山地の大人形や北茨城の人形に共通点を見だし、また福島県入道野は天

王信仰との関わりを強く持つ地域より、一つの分布域を形成していることを指摘している。また、鹿島様についても、秋田県以外にも、房総半島にも集中して分布していることの報告も興味深い。

「第五章 人形道祖神の変容」では、仮面、石塔、木像、自然石を芯にした人形の発見などから、人形道祖神の石像化を考えている。現在は面のみであるが、かつては人形を作っていた事例や、人形の立てられた場所に石塔が立てられている事例、また、木像が立てられている事例、自然石を芯にして人形を作る事例から、人形の恒常化が起こってきたことを示す。また、本書で「人形道祖神」と呼ぶ事例の多い秋田県において、横手盆地南部に見られる石像の存在がある。これなどは、人形の腰に藁の腰蓑をつける例があることなどから、藁などで作った人形から石像化したのであることが想定できる。また、この章では、秋田県大曲市において人形作りの復活の報告がなされている。これは村で風邪が大いに流行ってそれ以来人形作りを復活しているという伝承であるが、神野は「一度消えたようにみえても民間の伝承、とくに信仰は根強く人びとの潜在意識の中には生き残っていて、再び息を吹き返すこともあるのだということを、これらの例から思い知らされた。」と延べ、「とくにモノ（この場合は人形の面や頭部）の残存が、復活のための有力な核になることもわかった。」としている。

「第六章 東北日本の人形道祖神の特質」は、第一編のまとめであり、これまでの事例をまとめ、神野の考察がなされている。神野は、作業仮説として上記五つの共通要素を「人形道祖神」の「定義」としたが、調査の結果、その定義はいくらかの広がりを持つもののほぼ「人形道祖神」の概念に適していたと考えている。ここから、神野は名称、素材と形態、行事日の性格、立地と境の観念、祭祀の主体、人形の機能に分けて考察を加えている。そして、

「人形道祖神」の生成については、まず、人形は村人を代表する形代、あるいは疫病神（悪霊）の依代という性格を持つもの、であった「神送りの人形」が、村人を代表する形代、あるいは疫病神（悪霊）の依代、という前者の性格を持ちながらも、防御を意図して恒常的に祀られることによって疫病神（悪霊）の猛威を避ける守護神に性格を転換したものが、「人形道祖神」と呼べるものではないか、としている。神野は、「人形道祖神」は、我国の道祖神信仰の中に位置づけて考察することをここで提唱している。

「第二編 小正月の道祖神祭り与人形」では、中部日本を中心とする地方で小正月の行事に作られ祀られる人形を取りあげ、これと道祖神信仰との関わりを検討する。「第一章 門入道と家ごとの人形道祖神」では、まず伊豆半島から静岡県東部にかけて集中して分布する「門入道」と呼ばれる木偶を取り上げる。これは、静岡県、周辺の実梨県、東京都、群馬県、長野県、新潟県などに類例をたどると、これら小正月の人形が道祖神の信仰と密接な関係を持っていることが理解された。神野は、この木偶成立の背景を「ひとつは家々の門口に呪力として立てられる棒や薪に守護神としての神格が意識され、神像へと昇華」したことを挙げ、もう一つは、「家族の身代わり（形代）としての災厄・疫病を背負ってくれるヒトガタ（人形）が家の境界神の像に転換していった」と二つ捉えている。また、道祖神との関わりでは、そのまま道祖神に相当する場合の名称で呼ぶ例、道祖神に奉納される木偶、道祖神祭りで人形が焼かれる例が提示される。

「第二章 村ごとの人形道祖神」では第一章で紹介された小正月行事の人形が、主に家ごとに作られ祀られる木偶の場合が多く、それとほぼ同じ地域に、同様の人形を小正月行事にムラごとに作る例が紹介されている。これらは、世の中の悪いモノゴト、皆に嫌われることがらを背負って、小正月の火と共に村か

ら退出してくれることを人々が望んでいたと指摘している。そして、新潟県・神奈川県・東京都・長野県・福島県・山形県に道祖神の藁人形を焼く行事の存在を確認し、その分布地域は中部日本の石像道祖神の密集分布地帯の南北の外れに広がっており、これはまた石像道祖神を焼く習俗の分布ともほぼ重なっていることを注目すべきだとしている。

「第三章 石像道祖神を焼く習俗」では、関東甲信越に主に見ることのできる道祖神の石像や、御身体と呼ばれる石をを小正月の火の中に投げ込んだりして焼いてしまう例を紹介している。神野は、道祖神は本来、焼き捨てられるべき性格を持っていた、とこの習俗を説明する説話などを紹介しながら述べている。そして、石像物の道祖神を小正月の火で焼く習俗の背景には、小正月に木や藁などで作った人形を焼く習慣が隠れていたのではなかったか、という仮説を提示する。その理由に小正月にそのような人形を作る習俗が石像道祖神を祀る地域と重なるように広く分布していること、そしてそれらの中には道祖神像とされる人形や小正月の道祖神行事であるドンド焼き・サイト焼きなどで焼かれるものが多いことを挙げている。本来は、小正月ごとに来訪し追放される神とされてきたものが、恒常化された神像に変化していくが、かつての習慣になれ親しんでいた人々の手によってあえて火の中に入れられ、そうすることによって村人たちの災厄を払う目的を成就させることができると推測している。神野は、小正月の火で藁や木などで作った人形を焼く習俗と、石像物の道祖神を小正月の火で焼くことが、同じ趣旨に由来する習俗であることをここで確認している。

「第四章 家々を巡る人形道祖神」では、新潟・山形・長野の各県に伝承される子供たちや青年たちが小正月の行事に祀られるドウロクジン・ドウソジン・サイノカミ・セノカミ・モウス・デクなどと呼ばれる人形を携えて家々

を勧進して巡る行事を紹介し、その役割として祓いの形代としての役割を指摘できるとしている。また、二つ目の人形の機能として、本来は災厄と共に焼かれるもの、あるいは焼かれないとしても送り出されるものだったことを想定している。人形から神像への転換によって、人形を伴う勧進にも、災厄を託する祓いの行事から、福神的な性格を持つ神像を伴う来訪神の行事へと意識の変化が生じたものと考えている。

「第五章 道祖神を焼く意味」では、スケールの大きな道祖神祭りとして知られる野沢温泉の道祖神火祭りと、富山県入善町上野地区の小正月のサイノカミ祭りを紹介している。野沢温泉の道祖神祭りでは、木像の道祖神が辻に立てられ、最終的に社殿ごと焼かれてしまうことなどより、この道祖神祭りは、厄年の男たちの厄祓いの性格が強く見えることなどが指摘してある。富山県入善町の例では、説話が載せられ、サヘノカミが行疫神に酷使されている様子が書かれてあることに注目している。ここから両者の力関係を推察し、疫病神（行疫神）と道祖神（避疫神）の力関係は逆転しうることを示唆できるものとして重要視している。

「第六章 神像への変容」では、これまで見てきた小正月の火祭りで焼かれる人形道祖神の中にも、焼かれず恒常化している例が述べられてある。具体的には、今年のオリンピックでも有名になった長野県大岡村芦ノ尻のドウロクジン、山梨県小菅村長作のドウロクジン、同県上野原町郷原のドウロクジン様、長野県松本市とその周辺道祖神の木像である。芦ノ尻のドウロクジンは石碑に藁製の神面を被せた形態で、神野はその変遷を、始めは藁人形の人形道祖神を作っていたものが、のち恒常化して石碑に変化し、しかし後、石碑という代用品では気の済まなかった人々が、石碑を芯にしてもう一度昔のような神像を作ったのではなかったのか、と考察している。こ

れも、人形道祖神の恒常化を考える上では重要な事例になりえるだろう。木彫りの面をつけた藁の体を持つ人形で、着物のみが毎年新しく作られ、着せ重ねられ、小正月のみ祀られる長作のドウロクジン、木像で、長作と同じように小正月のみ村の辻に祀られる郷原のドウロクジン様、焼かれず祀られる松本市周辺の木像も、人形の恒常化を指し示す事例として捉えられている。

「第七章 小正月の人形と道祖神」では、第二編のまとめとあるようにこれまでの小正月の行事に登場する人形を、主に道祖神信仰との関わりを検討しながら「人形道祖神」の第二類型として把握できる特徴について総括する、考察の章となっている。まず、対象範囲として小正月に祀られる人形のうち、①道祖神（塞ノ神）あるいはこれに類する神名を与えられたり、②道祖神（塞ノ神）行事と考えられている火祭りや勸進行事などで主要な役割を果たしている人形、あるいは、③門口などに祀られて家ごとの守護神的役割を果たす人形、と定めている。以後、分布域、呼称、素材と形態、祭り方と機能に分けて考察し、その結果小正月の道祖神行事に関わりの深い人形の性格を総合的に捉えると、地域の人々の災厄を担って小正月の火で焼かれる、村人を代表する形代としての人形の性格が濃厚になるとし、それが次第に災厄を防いでくれる守護神と考えられるのではないかとまとめている。ここから、小正月の行事ごとにツクリモノの一つとして作られ祀られていた木偶や藁人形が、次第に恒常的に用いられて、神像にまで変化したと考えられるとしている。

「第三編 道祖神像の成立」では、これまで述べてきた東北日本に主に分布する東北日本型、あるいは「村境の人形道祖神」と、関東甲信越地方を中心に分布する中部日本型、あるいは「小正月の人形道祖神」の二つの異なるタイプの人形道祖神の性格に再度検討を加えた、神野の人形道祖神論の総括となっている。

る。まず、「第一章 人形道祖神と道祖神信仰の歴史」では、日本における道祖神信仰の歴史をあとづける。『古事記』『日本書紀』から『小野宮年中行事』での、具体的な姿の記述など、人形道祖神の姿がすでに平安時代に想定できることを示している。また、近世の石工の活躍などから中部日本における道祖神の歴史においては石像の道祖神像は近世以降に発達した比較的新しいものであること、双体道祖神については信州石工などの活躍が影響しているらしいこと、その中でも比較的古い石像の分布域に木偶などの道祖神の人形（小正月の人形道祖神）が分布していることが考えられ、これらの事実から道祖神の石像成立の背景には「人形道祖神」の存在があったと考える可能性を見いだせるとしている。また、菅江真澄の紀行文に記されている「人形道祖神」を紹介し、『秋田風俗問状答』『北越雪譜』『房総志料統編』などからも人形道祖神を認め近世においての存在を確認している。この章ではほか紀年銘のある人形道祖神から道祖神の石像物の建立年代にふれ、石像物と人形道祖神の時代関係をたどっている。

「第二章 人形道祖神の二類型」は、本書の総まとめにあたる。まず、「道祖神」は日本においては大変ポピュラーな、しかも古い歴史を持つ民俗神であり、基本的には境界を意識させる路傍に祀られ、人々の生活空間に進入してくる災厄を防ぎ、人々の安穏な生活を守る境の神様と考えられていると述べる。そして関東甲信越を中心にした地方で、村外れや辻などに祀る石像などの石像物を信仰対象としているとしていることは、いわば特異に発展した道祖神信仰の一面であり、人形のかたちをした道祖神像（村境の人形道祖神）という従来かえりみられることのなかった道祖神信仰の一類型を見いだすことができたとする。中部日本には木偶や藁人形の道祖神を小正月に祀る「小正月の人形道祖神」の類型を見いだせ、以下二つのタイプを共通項の人形の神、

境の神、性の要素の三点から比較検討して、「人形道祖神」として包括的に捉えている。まず人形の神では、いずれも村外れなどの路傍に立てられるという特徴を持ち、藁人形や草人形のほかに、木彫の面がつけられて送り出される形態のものが少ないとし、人々の間に追放する人形神から守護神へと意識の転換が生じた想定する。境の神、という点からは、この二つの類型は、必ずしも同じ基準で分けられる分類的なタイプを示すものではない。第一類は「村境に常設する」という要素を前面に出したものであり、第二類は「小正月」という祭りの時期を問題にしている。ただし、前者の類型には小正月に祀る例はほとんど認められず、後者の類型には「道祖神」に相当する人形を祀って送る例は見受けられない。性の要素からは、神野はあまり重視せず、これらの人形神は人間の姿を借りて「境の神」を造形したものであるから、等身大などの大きさの男女の人形神を作れば、人間の性の特徴が神の像にも造形されるのは当然としている。神野は、ここから性神の分担を東北日本の地域の金精信仰などを理由に考えている。

また、神野は人形が村外れに送られて立てられたまま放置される例を青森県などで見ることができるが、これは、恒常的に祀られるという意識がないので人形道祖神とは言えない、としている。「人形道祖神」とは、送り出す側の意識の転換によって、災厄を託された同じ藁人形が災厄を統御する神の像に成長し、守護神的な人形に一八〇度性格転換したものである。よって、人形道祖神とは、一人ひとりの形代ではなく、家族の人たちや村人たちから託された災厄が大量に集積されたものなのであり、「集積された災厄の塊」がもろもろの災厄を撃退する強力な霊力を獲得すると見なされているのである。同じように、第二類型のものも、ヒトガタと同様の役割を果たして、小正月の火で焼かれて送り出されたものが災厄の集積から、次第に小正月に祀ら

れる守護神的・福神的なものに変化し、恒常的に祀られるようになったものと、考えている。神野は二つの類型の人形道祖神は、それぞれを異にして発達を遂げながらも、藁や木といった身近な素材で作られた「人形」という素朴な造形物の形式をとりつつ、日本の「道祖神信仰」の主要な一形式の一つとして伝えられてきたもの、とまとめている。

「第三章 問題点と今後の課題」では新事例の発見、個別のインテンシブな地域研究の進展と必要性を指摘し、日本の偶像崇拜・神像の発展の観点からこの種の人形神の民俗の再評価を考え、人形道祖神の形と色彩、とりわけ木彫の頭や木偶形式の身体の姿には、現代の日本人が忘れていた民族的な造形感覚が示されているようにも思われることも、付け加えている。また、海外との比較も考察の範囲に入れ、保存の課題をも重きをなしている。

「補論 海外における人形道祖神の類例」では、まず朝鮮半島の長柱を紹介し、人形道祖神との比較を試みている。また、中国雲南省の少数民族ハニ族の村の門に伴う木製の彫像について、またタイ国アカ族の村の類例を合わせて、人形道祖神との比較を試みている。いずれもよく似た共通項を持ちながらも、やはりそれぞれ古代以来の独自の歴史の中で、今日伝えられる姿が次第に形成されてきたものであることを想定しなければならず、今後の課題として考えなければならない問題であろう。

以上、本書の内容を大づかみではあるが眺めてきた。以下、若干ながら私の見解、本書への批判をを付け足してこの論を終えようと思う。まず、全編を通してまず感ぜられることは神野の二十年以上に渡る膨大な事例の数である。すべて一人で歩き、見、聞いてきたその資料には圧倒的な重みがあり、その前には言葉を失ってしまうほどの迫力がある。しかし、私が最も気になるところは、神野の藁人形を「作り」「祀る」ところまでのみを提示

している部分である。あくまで、「カタチ」に示される「モノ」にこだわり、それを追求する姿勢を貫いてきた神野の態度であるが、ではなぜ「処理」するところまで記述しなかったのか。「モノ」を中心に据えるならば、それを「作り」「祀り」そして「処理する」ところまで見て始めて、その「モノ」に対してアプローチできうるのではないだろうか。例えば、新潟県東蒲原郡の事例に関して言えば、一年前の「ショウキサマ」は、そのままその場で放置される。なぜ、焼かれず、また流さず、その場に放置したままであるのか。実際、大牧という地域では焼くことに関しての禁忌まで伝えている人にも出会うことができた。その位置づけはどうか。

いったん、巨大な霊力を持ちえた「人形道祖神」であるが、一年経つ度に新しく作り替えられてしまう。では、その霊力を持ったまま放置される人形道祖神に対しての扱いはどのようなものなのか。ひとたび聖性をまとったモノがつけてしまう、「曖昧なケガレ」のような意識はあるのか、人々の意識はどのように動いているのか。調査地を絞った他との民俗事象との比較を含めた地域研究がまだこの「人形道祖神」について今後はより必要になってくると思われる。

最後になるが、課題の一つに、海外との比較も挙げられていたが、その一つとして、中国における「石敢当」を考えて良いと思う。この境を守る表象物の存在は、日本にも見ることができ、ほか、中国大陸、台湾、沖縄とアジアに広く分布していることが報告されている。この比較もまた、人形道祖神論においては、非常に興味深い事例の一つであろう。だが、当然であるが、日本社会における「境」と、他国における「境」の違いを厳密に把握してから、両者の比較を試みる必要がある。台湾では、日本における「村境」が見えない、という報告もされており、十分注意して比較を試みねばなるまい。

以上、本書の内容と論旨を紹介し、若干ではあるが、私見と、比較研究における視野を述べてみた。しかし私事を途中に含めなどし、ややまとまりのかける文章になってしまった。私の読み違いなど、どうか至らない点はご容赦いただきたい。本書によって、神野は人形道祖神の定義を提示したのであり、その定義の検討も含め今後我国における道祖神研究はさらなる発展を遂げることと思われる。我々は神野の業績を受けとめ、新たな道祖神研究を展開していかねばなるまい。

(白水社 1996)

参考文献

- 木内裕子 1988「境の見えない「村」」『文化人類学』5 アカデミア出版
菊池健策 1997「書評：『人形道祖神』」『日本民俗学』210号 日本民俗学会
周星 1993「中国と日本の石敢当」『比較民俗研究』7 筑波大学 歴史・人類学系 民俗学研究室
高橋典子 1997「書評：『人形道祖神』」『民具研究』115号 日本民具学会
徳丸亜木 1992「『信仰民具』と神祭りの場」『日本民俗学』191号 日本民俗学会
柳田国男 1934「神送りと人形」『旅と伝説』7巻7号

韓国比較民俗学会編

『韓国の民俗と性』

金 花子*

本書の構成は次のとおり。

序

1章 文献節話における性の受容の様相とその意味—崔 雲植

2章 タルチュム(仮面舞踊)に形象化され

※筑波大学大学院地域研究研究科